

KIOG Working Paper

No.0901

February 2009

「学び合い」と「連帯」の経済学をめざして
ー現代経済学批判ノート（1）ー

佐々木 建

Kyoto Institute on Globalization

京都グローバリゼーション研究所

目 次

「学び合い」と「連帯」の経済学を目指して
・・・・・・・・・・

櫻井秀子著「イスラーム金融」を手にして考えたこと
ーイスラーム研究者との協同を模索してー
・・・・・・・・・・

あとがき
・・・・・・・・・・

「学び合い」と「連帯」の経済学を目指して

1

経済学は今、グローバルゼーションあるいはグローバル資本主義という奇怪なモンスターの出現にたじろぎ、それがつくり出す危機を捉えきれずに、その権威は急速に低下するばかりである。経済社会全体の奇怪さ、社会全体に蔓延するモラルハザードを見聞するにつけ、経済学者と自称することに嫌悪感を覚え、もどかしさと焦燥感がにとらわれているのは、はたして私だけであろうか。

社会主義体制の崩壊によって資本主義的市場経済は地球規模に拡大し、人類が育んできたさまざまな経済システムと生活原理がグローバル資本主義の大波に巻き込まれている。その大波が人類全体に平等な豊かさと安定をもたらすものではないことは理解していても、それに対抗する理念と運動を見いだせずにいる。衝突と小競り合い程度のものは繰り返されてはいるものの、奔流となって時代をリードする主張は現れない。それどころか、グローバル資本主義の仕組みの解明の門口にさえ到達し得ていないのではないか。

混迷は、大学の講壇を支配する主流経済学でもある市場

原理主義的経済学に止まらず、経済学全般に共通している現象ではないだろうか。多くの経済学者は、世界経済の総体を俯瞰できる理論的枠組みを模索し、人類の未来への展望について真摯に論議をしなければならない歴史的転換点に直面しているのに、講壇上から細分化されたテーマを講じ、過去の議論に依拠した教科書づくりに満足している。少なくとも私にはそのように見える。

講壇経済学が作り出した分析の枠組みの限界が明らかになっているだけではない。貨幣表現された市場経済の地球大的な拡大が、それぞれの民族や地域の文化的基礎の相違との間に深刻な対立や相克を生み出している現実を座視することはできない。アラブ世界やサハラ以南アフリカの経済の現実、中国をはじめとするいわゆる BRICs（1）の登場の衝撃を観察するならば、そのことを理解することにさほどの時間を要しない。経済学は、講壇派であろうとマルクス派であろうと、あるいは社会民主主義派であろうと、地球的視野で全体像を見通せる視角を欠いていることは明らかだ。経済学は地球全体を説明する原理ではなくなっつつあるのだ（2）（i）。

それだけに止まらない。焦眉の人类的課題である地球環境問題を考えてみよう。地球環境危機の最大の原因の一つが人間の工業的経済活動、市場化された経済活動にあることは明らかであり、温暖化ガスの急増が深刻な景気変動を

もたらしていることが共通の認識になっているのに、経済学はそれに対する有効な対応策さえ出せずにいる。続発する自然災害に直面して、近代世界が作り上げたシステムもハードウェアもあまりに硬直的で、リスクに柔軟に対応できないことが明らかになっているのに、経済学はこれも「外部不経済」としてしか理解しない。経済学は市場メカニズムをエコロジー的危機を認識できるものに作り替えていく緊急の課題に直面している。経済学は国民経済の枠を超えて、国益の枠を超えて、地球的視野で問題を提起できる基準の獲得を迫られている。

危機が深まる中で「連帯」や「共生」の理念と市場の整合性に疑念を抱く論者も増えてはいる。しかし、グローバル化した市場を「連帯」の視点から批判しようという論議はいっこうに深まらない。「セイフティネット」を張ればよいという。所得格差の地球規模での拡大、絶対的貧困階層の増大に有効に対応できる有効なネットなどあろう筈がない。システムを変えることこそが求められているのに、なにをどこから始めたらよいのかわからずに、門口で迷い続けている。

そもそも「経済」とは何だろうか。それが確定されなければ、経済学の課題も明らかにならない。これまで経済学者はこれを自明のことと考えてきた。経済とは貨幣表現される市場的關係の総体であると、少なくとも私はこれまでそう考えてきた。貨幣表現される市場経済を自明のものとし、その外にあるものは未開の非文明的關係で。それは経済学の対象とはなり得ない。いわば経済人類学の対象と捉えられたのである。

現代世界を観察すると、GDPでも貿易額でもよい、とにかくそのような基準で測定すると、貨幣で表現される市場の90パーセントは先進国によって占められる。このことから、世界経済とは先進国と先進国間の關係だという通俗的理解が生まれる。世界人口の圧倒的部分を占めるのに、全世界GDPわずかを占めているにすぎない非先進世界は経済学の対象とはなり得ないのである。せいぜいのところ、先進国型開発を受容する部分に限って、開発経済学の対象とされたにすぎなかった。「発展途上」というコンセプトは、このようなものとして確定されたのである。世界人口の圧倒的部分を占める人びとは経済学の対象から切り捨てられたのである。

経済活動を円滑に維持すること、それは人類の歴史と共に古い課題であった。古代王権の最重要政策は、貨幣制度と度量衡制度を統一し、そして交易路の整備によって交易や通商を発展させること、統一した租税徴収制度を確立することであった。古代メソポタミア、バビロンの王ハンムラビ（在位、紀元前 1792-1750）の命によって制定された法典、いわゆる「ハンムラビ法典」などはその好例である。そこでは所有権、契約その他の保護についての条文が重要な位置を占めている（3）。

記述された経済学は古代以来、アリストテレスの政治学、経済学、倫理学の体系的記述に始まって（4）（ii）、ヨーロッパの学の体系の中心にあった。それはアジア世界やイスラム世界についても言えることであろう。世界宗教の登場によって、経済活動を宗教倫理とどのように合致させるかは支配者の重要な課題であった。さまざまなすり合わせの苦闘が展開されたのである。市場こそが経済とする「経済」の世俗的理解が普及したのはごく最近のことであり、人類の経済認識の長い歴史からみると、時間的に見てきわめて短いもので、限定なものと言わざるをえない。

しかもその世俗的認識さえもが、日々現実によって乗り

こえられている。国際通貨投機や原油市場投機が常態化している。それを押しとどめる施策などもはやありはしないのである。

4

「経済」とは何か、人類の知的先達が解明しようとした「経済」とは何かと問われれば、私は躊躇なく「共に豊かになる」仕組みであると答えたい。一握りの人びとが豊かになるのではなく、「共に」豊かになることが肝心なのだ。この場合、非効率を実質上是認するような社会主義、共産主義を主張しているのではない。他者との関係を見据えた豊かさである。地球環境問題を考えてみたらよい。世界の資源のほとんどは先進国によって占有され、消費されている。このままいけば、将来は他の国々には何も残されない。「持続可能な発展」はどのような場合でも前提されるべき規範的枠組みである。

地球上には実に多くの、多様な経済がある。人権が尊重されるべきものがあるなら、それらの経済の存在も同じように尊重されなければならないのではないか。非常に単純なことだが、地球大という視点で考えるときに前提とされる

べき枠組みなのである。経済学はそのように豊かになるシステムを解明し、批判し、啓蒙することものでなければならない。地球大的に共通する経済原理、優勝劣敗ではなく「共に豊かになる」原理を明らかにすることが求められているのではないか。

経済学の父として畏敬される A・スミスが「諸国民の富」の刊行に先立って 1759 年に著した「道徳感情論」で、彼はその論述を「同感」(sympathy)の解明から始めている。その冒頭の記述は感動的である。そこには経済学の最も重要な理念的出発点が示されていると私は考えるので、引用しておこう。

「人間がどんなに利己的なものと想定されうるにしても、あきらかにかれの本性のなかには、いくつかの原理があって、それらは、かれに他のひとびとの運不運に関心をもたせ、かれらの幸福を、それを見るという快樂のほかはなにも、かれはそれからひきださないのに、かれにとって必要なものとするのである。この種類に属するのは、哀れみまたは同情であって、それはわれわれが他の人びとの悲惨を見たり、たいへんいきいきと心にえがかせられたりするときに、それにたいして感じる情動である。われわれがしばしば、他の人びとの悲しみから、悲しみをひきだすということは、

それを証明するのになにも例をあげる必要がないほど、明白である。すなわち、この感情は、人間本性の他のすべての本源的情念と同様に、けっして有徳で人道的な人にかぎられているのではなく、ただそういう人びとは、おそらく、もっともするどい感受性をもって、それを感じるであろう。最大の悪人、社会の諸法のもっとも無情な侵犯者さえも、まったくそれをもたないことはない。」(5)

人間をどのように利己的なものと想定しようと、有徳、不徳にかかわらず、人間には内在的に相手の状況に同感する感情があると、スミスは主張する。「利己的」という規範が市場経済の主役である経済人の規範と理解されるのが一般的であるが、私はむしろ「同感」こそ人間存在の根源にかかわる共通の経済規範と理解したいと思う。スミスにとって市場経済研究は人間関係を律する社会的規範の解明であった。彼が言う個人の「利己主義」は、あるいは『諸国民の富』で明らかにした市場経済の原理は、人間としての連帯性を基盤にしたものであったのではないか。スミスを論じることからはじめたのは、「共に豊かになる」という私の主張と共通の基盤に立っていると考えたからである。

スミスの原理は、自由放任主義とされ、個人の利己心に経済をゆだねれば、見えざる手によって効率的、合理的解

決が図られると理解されてきた。利己心には類的共感と共存しているなど、相手を打ち負かす競争で相手を哀れむなど、経済学者は考えだにしなかった。その後の経済学はスミスの態度を「道德哲学」だとして体系外に捨て去り、ひたすら経済学の純化を目指したのである。経済学の文献からは、「同感」も「連帯」も消えてしまった。それらのコンセプトは、市場経済から疎外された集団のイデオロギーとして生き残ったにすぎなかった。

スミスのこの主張に依拠して見た場合、グローバリゼーションの時代に経済学に求められえいるものは何か。経済学は社会進歩を見通す歴史的予見性についての權威を取り戻す以前に、その枠組みがもはや「共に豊かになる」、共感するという類的連帯性と無縁のものになっていることを自覚しなければならない。

【注】

(1) ブラジル (Brasil)、ロシア (Russia)、インド (India)、中国 (China) の頭文字をとった造語。2003年にアメリカのゴールドマン・サックス社が初めて使用した。この国家群の世界経済への登場の歴史的意義については別の機会に触れたい。

(2) 紀伊国屋書店のPR誌『アイ・フィール (i feel) 』
2004 年第 30 号 (秋号) に「主流派経済学にカウンターパンチを」と題する、中谷巖と岩井克人との対談を発見した。
岩井の評価はさておき、中谷はカウンターパンチの対象である主流派経済学の旗手の一人と私は考えてきたが、その旗手が自らにカウンターパンチを加えるというのだから、奇妙な話ではないか。彼によると、西洋起源の経済学を西洋の一神教的理念と密接な関係がある。「古典派・新古典派経済学はその延長線上にある。だから・・・きわめて抽象的かつ形而上学的な観念の世界から生まれてきたといえることができる。そういうことは、われわれ日本人が、経済学を学ぶ際に押さえておかなければならないポイントです。」(9 ページ) 多神教と稲作文化という文化的土壌に接ぎ木された学問であり、違和感があるのだという。そして、「実は私も、日本に合わない理論を日本に持ってきて、あたかも伝道師のように説いて回るのは、もう止めようとするようになりました」と自己批判の弁を披瀝している (8 ページ) 。この自己批判がどの程度のものか、日本の文化的伝統に根ざした市場経済学とは一体どのような内容なのか、彼の今後の議論を見守りたい。一言付け加えさせてもらえば、現代西洋経済学を一神教や形而上学的観念と結びつける態度は承服できない。経済学を今のよう純化させていった歴史には別の説明が必要である。

(3) 中田一郎訳『ハンムラビ「法典」』古代オリエント

資料集成 1、リトン、2002 年 5 月。

(4) 経済や経済学の語源となったオイコノミヤは本来、家庭経済を意味していた。そ文献的出発点はクセノポンにまでさかのぼる。あるいはそれ以前についても多くの断片が存在するのかもしれないが、まとまった著作としては、紀元前 369 年から 354 年頃に著された『オイコノミコス』が最初と思われる。

(5) アダム・スミス著、水田洋訳『道德感情論』(上)、岩波文庫、2003 年 2 月、24-25 ページ。

【補注】

(i) 中谷巖の自己批判は次の形で刊行された。中谷巖『資本主義はなぜ自壊したのかー「日本」再生への提言ー』集英社インターナショナル、2008 年 12 月。表紙の帯には「懺悔の書」とあり、本の中では「転向」とある。何に転向したのか。江戸時代、明治初期にあったとする日本的平等と「安心・安全」への回帰をもとめるのだという。その日本歴史の認識は軽薄にすぎるものだ。かつて日本的なものを日本の経済や経営の優越性の根拠にした輩が排出した時代があった。彼らはその議論をいとも簡単に投げ捨

てて新自由主義の軍門に下った。いままた昔に戻ろうというのだ。日本国内で上から下まで日本的特性を投げ捨てしまい、忘却の彼方に押しやってしまった現状を見て、再生は可能だろうか。可能と言われるのなら、自身の懺悔を頑張って伝道してもらおうではないか。本書の最後で次のようにまとめている。グローバル資本主義という「モンスター」を誕生させたのは、「欲望を抑えることができなかった、他ならぬ我々自身であると。」「欲望の抑制」以外にこのモンスターを押さえ込むことはできないというのだ。読者であるあなたの行動にも責任があるというのだ。これぞまさしく伝道者ではないか。

(ii) 最近、クセノポンの『オイコノミコス』の 1794 年にハンブルクで出版されたドイツ語訳の復刻が刊行された。*Xenophon, Oikonomikos oder Xenophon vom Haus-Wesen*. Faksimilie der 1734 in Hamburg erschienenen deutsch-griechischen Ausgabe, in: *Klassiker der Nationalökonomie*, Verlag Wirtschaft und Finanzen クセノポン、および同時代の文書断片のギリシャ語本文とドイツ語訳を対照させた次の書物を発見した。*Oikonomika. Quellen zur Wirtschaftstheorie der griechischen Antike*. Eingeleitet, herausgegeben und übersetzt von G.Audring und K.Brodersen, Text zur Forschung Band 92, Wissenschaftliche Buchges

ellschaft 2008

ヨーロッパ思想の末端に繋がりながら学問してきたのに、私には古典研究の基本的素養がまったくといってよいほどない。ギリシャ哲学の専門家たち、また中世キリスト教史の研究者たちは、アリストテレスもトマス・アキナス。M・ルターも経済学にとって不可欠の文献だと言ったらさぞかし驚くことであろうが、彼らの研究の広がりが私のような無学のものには必要なのだ。ところが、世の哲学者たちの仕事ぶりを見ていると現代の理解に貢献したいという視点に欠ける人が多い。彼らの仕事はまったく役に立たないのである。

最近次のような書物を発見した。前述のクセノポンの復刻版が取り入れられた経済学古典復刻シリーズの編集方針に対応しており、クセノポンの記述から始められている。

Bertram Schefold, Beiträge zur ökonomischen Dogmengeschichte, ausgewählt und herausgegeben von V. Caspari, Wissenschaftliche Buchgesellschaft 2008

【付記】このノートは2005年3月21日に本研究所ウェブサイト公表したものである。若干の字句の訂正と補注を除きもとのままで再録した。

櫻井秀子著『イスラーム金融』を手にして考えたこと
ーイスラーム研究者との協同を模索してー

1

『フォーリン・アフェアーズ』誌1993年夏号に発表されたサミュエル・ハンチントン（Samuel P. Huntington）の論文「文明の衝突か」（"The Crash of Civilizations?"）に接したときの衝撃はいまだに忘れることはできない（1）。彼の警告に言うイスラーム世界との断層線上での戦争は、すでに始まっていた。

ベルリンの壁崩壊後にドミノ倒しのように急速に進んだ社会主義体制解体の連鎖の衝撃によって新しい世界像、世界認識の確立を迫られていた私にとっては、この問題提起は、いささか粗い分析とはいえ、新しい世界像を示そうとする迫力に満ちていた。私も含めて社会学者たちは、資本主義と社会主義の対立こそが近現代史のライトモチーフであり、イデオロギーの対立こそが分析の対象であった。この対立は基本的に異質のものではなかった。社会主義は資本主義の中に生まれ、その継承者として理解されたいからである。ハンチントンの問題提起は近代の脆弱さとその基盤の意義を再確認させてくれたと思う。露呈されつつある基盤について、私を含めて多くの人ほとんど知識がなかった。植民地を研究する人以外はイスラームなど学ぶ必要を感じたことはなかった。

激変の中で社会学者が選択した道は、自信喪失してイデオロギー的探求を放棄するか、アメリカ極支配に、あるいはその経済学に身を委ねることであった。社会主義の解体で転がり込んだ資本主義の勝利、アメリカ極の支配の時代は決してイデオロギー終焉の時代ではなかった。アメリカ発のイデオロギーを行きわたらせようという時代であった。それに無批判に身を委ねた結果がいま体験しつつある地球的危機である。近代化イデオロギーを基礎にした経済学は瀕死の状態に陥っている。死んだといってもよいかもしれない。ヨーロッパに発し、アメリカを経て地球上に広まり、グローバル資本主義という怪物を生み出した近代化の行き着く先はとっくに見えている。資本主義は人類が直面している地球的課題を解決する展望は示せない

どころか、むしろそれを極限にまで押し進めてしまった。アメリカ証券市場の崩落にはじまった資本主義の経済的危機は底が見えないくらいに深刻である。地球環境危機をはじめとする地球的問題群の解決も。大国国益の衝突と妥協では解決できない。地球的危機はそれ自体の深刻さだけではない。この危機に対し反省の声など聞こえてこない。地球を支配しているのに、地球全体を救う責任を自覚していない。金融システムを救うともっともらしい議論をしながらグローバル資本主義の中枢を救済することを平気でやらかし、経済的に力のない国々や市民を犠牲にする。

一極支配イデオロギーはここに極まった。多文明世界でのヨーロッパ的、アメリカ的なイデオロギーの埋没の危機を自覚して共存を模索したハンチントンの問題提起と警告は無視され、悪の枢軸と闘う十字軍を標榜する大統領の登場によって対立は一層拡大した。この時代に開発とアメリカ的民主化を地球大的に広めることを何の反省もなく主張する輩をなんと評価すべきであろう。

2

地球大の人类的課題の解決を目指すにはヨーロッパ的、アメリカ的世界のイデオロギーを相対化した新しい枠組が必要だ。儒教的世界はもはや世界史的影響力を持ち得ない。現代中国に儒教的関係を発見することは不可能であり、おそらく文化大革命はその残滓をすべて取り払ってしまったのだろう。異様な資本主義が発展する素地が形成されていた。イスラームやヒンドゥーの世界がこの異様なまでの一極支配に抵抗する主体を孕んでいるかもしれない。そのことの意義をを考え始めてから十数年、残念ながらその考察の門口にも到達できていない。しかも、ヨーロッパ近代の歴史発展の帰結である資本主義・社会主義・第三世界という三分化論が崩壊した後でも、先進国、発展途上国、新興国等という「先進」を基準にした論議が当然のように進められている。後者の基準の方がもっと悪質だということにある。

地球を構成する多様な経済認識の間で学び合うこと、協同することが求められている。そうするためには共通の土台が必要だ。ところが、経済、あるいは市場経済という場合、当然のように資本主義的市場経済が支配的な状態と理解してしまう。現

実の経済的な営みを見るとそれは地球全体を説明しつくす原理といえない。価格や利益を競って競争する市場が支配的な国と地域は限定される。人間の経済活動は、生存維持に関わる直接的な生産と配分の経済活動が基礎にある。さらにいえば、効率とはほど遠い関係性を中心にした市場を含む。生存維持的で本源的な市場といってよいかもしれない。資本主義はその市場から出発し、その市場を侵食して「市場経済」を拡大していった。しかし、人間はそのような生存維持的で根源的な経済関係なしには生きられない。経済とは、資本主義的市場経済による生存維持経済としての浸食、あるいは前者の後者に対する寄生の総体である。地球上のさまざまな地域の経済の多様性を比較し、学び合うためにはこの視角の確認が必要だと思う。

3

前おきが長くなってしまったが、櫻井秀子氏の「スラム金融―贈与と交換、その共存のシステムを解く―」（新評論、2008年9月）を手にした時に、私がなんとなく考えていたことのすべてである。本書に眼を通して見て、この仕事は某有力経済紙の無署名書評が言うような「実務書」では決してない（2）。そのように使われることも意図されて執筆されている部分もあり、本書のメインタイトルでもあるイスラーム金融の取引形態を詳述して、関心ある読者に応えようという意図もある。

しかし本書の本当の目的はそこにはないと思う。第1に。うまく書き込まれているかどうかはともかく、イスラーム圏における「市場」と「経営」の特徴を明らかにし、「倫理と不可分の経営」たるイスラーム経営を効率優先の成長志向の資本主義に対する対抗軸として位置づけることをめざしている。第2に、グローバル資本主義批判の提案である。第3に、その分析を通して日本的経営のあるべき姿にも議論を展開している。

その着眼点と構想は、イスラーム地域研究の枠を大きく超えて、現代資本主義と経営の批判とその批判を踏まえた将来像の構築を目指すものだ。その点で、私のようなもっぱらヨーロッパ資本主義研究から出発して、その視点に限界を感じ、その限界を突破しようともがいている者と共通のコンセプトがありそうな気がする。これらの着眼点が他のイスラーム研究者とどのように共有されているかは知らないが、私は高く評価したい。

これまで多くのイスラームや中東地域が刊行されているが、ハンチントン以来の、あるいは私の地球全体の認識に接近しようとする仕事はまだ少ないのではないだろうか。

その着眼点を正確に読み解き批評することは、イスラームに素人の私には困難な仕事である。理解以前に素朴な疑問が解決されずに残っている。そもそも「イスラーム圏」とは何か。そこで展開されている「イスラーム的経営」とは歴史的、具体的にどのようなものかと思ひ浮かべられて展開されるカテゴリーなのか。ヨーロッパやアメリカの研究の場合には、研究成果の集積と体験が可能なることによっておおたのカテゴリーはその具体的事例で理解が可能である。ところがイスラーム世界の事態となると様子が変わった来る。メディアに登場する映像を見ると、イスラーム圏はまだ千夜一夜物語の世界といわんばかりの描写が続く。

アラブ首長国連邦の開発のものすごさ（そうとしか表現しようがない）を映像で見ている限り、資本主義的發展がヨーロッパ、アメリカ、日本を超えて進んでいるとしか言いようがない。トルコやエジプトの現実、中国系市民の旺盛な起業家精神をたくみに取り込んでいるとはいえマレーシア、インドネシアの経済の動向はどのように評価したらよいのだろうか。私には特異なイスラーム的資本主義が生成しているとした方が本来イスラーム社会がもつ原理との相克が理解できるのではないか。

イギリスに典型的に見られた発展を資本主義とするなら、その後展開した資本主義はみな特異なものである。自制的に、内発的に発展した資本主義などあり得ない。日本が軍艦によって強制されて歩み出し、第二次大戦の敗戦によって改革を余儀なくされたことかも明らかなように、さまざまな形態の資本主義との接触によって出発する。要は他人の労働を搾取するという構造と、資本に転化できる貨幣財産が集積されていることだ。イスラーム圏ではその条件が十分に成熟しているし、アメリカその他の西側諸国の軍事的、政治的干渉はその過程をさらに押し広げているのではないか。イスラーム的経営の定義がこのような現実をふまえて豊富化されることを望んでいるのだが。

4

最終章第5章「中道をめざす社会と経営」は私には一番惹き

付けられる部分である。著者は日本社会の仏教的基盤に着目して、イスラーム社会の倫理的共通点を指摘し、日本的経営に対する提言をおこなう。倫理と経営のバランスをとる「中道の経営」「相利共生の経営」は仏教的理念を旋回軸として実現できる。それこそが今後の経営のあるべき姿を与えてくれるとする。

資本主義的市場関係を一定の宗教的理念を踏まえて批判する視点はすでにかなり知られているが(3)、イスラーム学者の側からの積極的提言は希有のことではないだろうか。このような視点はこれから、地球環境危機、しかも温暖化に限定されず、資源、人口、貧困問題、自然破壊等の地球的課題の解決をめぐって、また進行しつつある世界恐慌からの脱出の道をめぐってさかんに議論されるにちがいない。

しかし、日本の大現実については疑問を感じている。企業経営のどこをひねくり回しても、仏教的理念など感じられないし、「中道」への志向などみじんもない。かつて日本企業の成功が日本独自の経営手法にあるのではないかとされ、国内外の学者たちの間で「日本的経営」の特徴が論じられた時代があった。30年ほど前の頃であっただろうか。その頃に収集した書籍もノートもすでに失われたので、正確なことを論じられないのが、いわゆる「三種の神器」論議にはじまって日本的な集団主義の基礎がイエカムラかに至るまで華々しく議論された。日本の地域市場や生存維持経済に重要な役割を果たしていたイエもムラも高度成長の過程でほとんど消滅していたが、多くの経営者たちはそのような日本的素養のなかで育ち、その頃の宗教的・社会的倫理を持ち合わせている経営者は存在した。労働者もTQC運動や改善運動に主体的に積極的に参加し、社会の内部から失われつつあった生き甲斐、やり甲斐を見出し、連帯感を感じ、企業への帰属意識を強めていた。まだ社会に名残があったし、生存維持経済、さまざまな関係性を含む市場はなお維持されていた。

日本的経営はすでに大企業の経営組織や手法としては滅んでしまった。日本的経営の再興はそれ自体としてはありえないのではないか。日本のリーダーたちの品性を見てみたらよい。かつてあった関係性をふまえた倫理を持ち合わせてなどいない。リッチとプア、勝ち組と負け組のコンセプトが論じられ、社会に内在すべき連帯性や関係性など消え去ってしまっている。

地球環境問題や貧困問題の現状を見聞するにつけ、私は自分が育った時代の地域市場や家族関係に組み込まれていた宗教的倫理や連帯感を重要な体験として思い起こす。それらの倫理や地域における連帯性のルネッサンスなしに地球的課題の解決

はあり得ないのではないか。当時の宗教的習俗への回帰を主張するわけではない。忘れていた「もったいない」という言葉が外国から再導入されているが、その言葉を使う人びとはそれが当時の宗教習俗に裏付けられた自然への畏敬の念の表現であることなど知らない。あまさず食べたのは、貧しかったからではない。生物を殺して得た糧に対する感謝でもあった。その感謝と畏敬の念の再生なしに地球的課題への取り組みは不可能だし、日本に住むものの貢献などあり得ない。私は唯物論者で宗教心薄い人間だが、その点にこだわり続けている。このような私の議論でイスラーム研究者の課題と共通点があり、協同が可能だろうか。

(1) この論稿は後に次の書物に仕上げられ、刊行された。
Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, New York 1996 (邦訳：鈴木主税訳『文明の衝突』集英社、1998年6月)

(2) 『日本経済新聞』2008年10月19日

(3) 巨大化する経済を批判し人間本位の経済の構築を提案し、仏教経済学の可能性を提唱していまなお影響を広げているE・F・シューマッハーもその1人である。E.F.Schumacher, *Small is beautiful. Economics as if People Matter*, Introduction by Paul Hawken, Point Roberts 1999, originally published in 1973 (邦訳：小島慶三他訳『スモール・イズ・ビューティフルー人間中心の経済学ー』講談社学術文庫、1986年4月)。さらに、イギリスでシューマッハー・カレッジを主宰するジャイナ教徒サティシュ・クマールの関係性の哲学も注目され始めている。Satish Kumar, *You Are therefore I Am. A Declaration of Dependence*, Foxhole 2002 (邦訳：尾関修他訳『君あり、故に我ありー依存の宣言ー』講談社学術文庫、2005年4月)。

【付記】このノートは、地域文化学会機関誌『地域研究』第11号、2008年12月に書評として公表された。

公表直後に、S・ハンチントンの死が報じられた。彼の代表作を一度は紹介する文を書いてみたいといつも考えていた。彼の論文を読んだときの衝撃を生々しく記憶しているからだ。その頃私は南部アフリカに関する共同研究に関わってヨハネスブルクに滞在していた。読むものが手許に

なくなったのでたまたま買い求めた新刊雑誌のなかでこの論文に出くわしたのである。そういう事情でもなければ、『フォリーン・アフェアーズ』を買うはずもなかった。彼は「文明の衝突」を回避のための対話を期待したのに、「衝突」を煽る議論として、あるいはそれを予告する議論として捉えられていたような気がする。

あとがきー「対話」と「学び合い」の時代へー

アメリカ合衆国第44代大統領バラク・オバマは就任演説の中で信仰の「多様性」(patchwork)の遺産こそがアメリカの強みであると強調した。アメリカは「キリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒、ヒンドゥー教徒、そして無宗教者からなる国家」であることを強調したことだ。ヒンドゥー教徒から無宗教者っつを含めてである。人種の多様性ではなく、信仰と文化の多様性を強調したのである。アメリカ国内ではその多様性による差別と憎悪を克服できてはいないものの、人種間の境界は消え去って「共通の人間性」が姿を現すことを確信するとしたのである(1)。

前任者のG・ブッシュにくらべるなら格段の前進だ。ブッシュの就任演説など読んだこともないが、その後の彼の言動からみて、かれがこの「多様性」を認識して政策を推進したとは到底考えられない。彼のよりどころは白人とキリスト教の優越性を掲げる福音派の倫理観であった。彼の口から出る悪の枢軸、十字軍等の表現にはそのことが明確に示されていた。それに比べるならオバマの態度はまだ公正であり、変化があると評価できる。

パレスチナ問題は対話の公正さを占ううえで最大の試金石である。アメリカのこれまでの中東政策はイスラエルよりの路線であった。それは明らかに国内の特定の人種、特定の信仰の人びとの要求にそった路線であったといつてよい。最近のガザに対する過剰な虐殺的攻撃、イスラエル総選挙でのウルトラ右派の躍進に対する国際世論の反応は、これまでとは変わり始めているように思われる。

長い迫害の歴史によってユダヤ人の中に醸成された選民意識に反省がない限りパレスチナ人との真の和解と共存はあり得ない。彼らがかってその信仰の特異さによって迫害された、まさにそのことを信仰の違う人びとに行使していることに気づかなければならない。気づかせなければならなああい。イスラエル支配層の領土拡張政策と人種隔離政策、自国内のマイノリティーに対する抑圧政策について自らそれをただすように仕向けなければならない。

アメリカの態度も変わらなければならない。アメリカは真の和解にむけた仲介者にならなければならない。

元旦恒例のウィーンフィル・ニューイヤーコンサートの中継を見た。プログラムのマンネリ化もありこの数年チャンネルをこの番組にまわしたことはなかったのだが、今年はその慣例を破った。指揮したダニエル・バレンボイムに関心があったからだ。彼に対する関心はその優れたピアニスト、指揮者としての演奏活動に止まらない。彼の中東における公正な和解を求める発言と活動に注目するからである。

ゲーテ生誕 250 年記念祭の 1999 年に、今はなき E・サイードとあい図ってドイツのワイマールにアラブ人、イスラエル人の若手音楽家を集めてワークショップを主宰し、ゲーテの『東西詩集』にちなんで命名されたウェスト＝イースターン・ディヴァン・オーケストラを設立した。この活動はアメリカ、ヨーロッパの心ある市民によって支持され、その評価は日ごとに高まっている（2）。ニューイヤーコンサート恒例の新年の挨拶で彼は世界の平和と共に中東における正義の実現を訴え、盛大な支持の拍手が会場一杯に広がった。

その拍手は彼の音楽性に向けられただけでなく、たった一度の演奏会でも大きな政治的力となる証しでもあった。かつて K・マルクスは「ヘーゲル法哲学批判序説」のなかで「理論もまた、それが大衆をつかむやいなや、物質的力となる」と論じた（3）。はたして現代の学問はどのように大衆を捉えて政治的力となりうるのだろうか。現状を見ると絶望的である。

「対話」が今年の、あるいはこれからの国際政治における最も重要なキーワードになることは間違いない。この傾向が文化や学問の次元でも展開されることを望む。しかし、自らの文化の優越性を潜めた「対話」は帝国主義の変種にすぎない。私が「学び合い」を強調し提唱するのは、お互いの違いを認め合いながらも、その文化的価値を対等のものと認め合い、共通の原理を作り上げる態度の意義を「強調したいからである。オバマにしたがえば「共通の人間性」(common humanity) が実現されることだ。そのための努力をいち早く開始したパレスチナ人 E・サイードとユダヤ人 D・バレンボイムに学ばなければならない。

【注】

(1) 演説の日本語訳は次を参照した。「朝日新聞」2009年1月24日付。

(2) 2007年にイタリアで刊行された後、多くの国で出版された彼の新著はこのオーケストラのメンバーに捧げられている。日本語版は次の形で出版された。ダニエル・バレンボイム著、箕田洋子訳「バレンボイム音楽論—対話と共存のフーガー」アルテスパブリッシング、2008年11月。サイードとの友情、オーケストラの設立の経緯と意義、パレスチナ問題の根本的解決についてのかれの「夢」が語られている。偉大な芸術家の壮大な政治的試みとその倫理性と道徳性の高さに感動する他はない。「和平」の問題ですべてを片付け、パレスチナ人の正当な運動を原理主義でくくるといった類の政治的啓蒙書よりもはかに説得的であり、真実に迫ることができる。いち早くこの書物を紹介された翻訳者と出版社に敬意を表したい。それと同時に、このように優れて政治的で文明批評的な書物があたかも純粋に音楽書であるかあのように出版されなければならないとおう日本の出版状況には失望させられる。本書とサイードとの友情の決勝である対話集は、パレスチナ問題を理解する上での必読書である。A・クゼミリアン編、中野真紀子訳「バレンボイム／サイード・音楽と社会」みすず書房、2004年7月。

(3) カール・マルクス著、城塚登訳「ユダヤ人問題によせて・ヘーゲル法哲学批判序説」1974年3月、岩波書店、85ページ。

(4) 今年のニューイヤーコンサートのプログラムには、2009年がF・J・ハイドンの没後200年にあたることを記念して、彼が楽長として仕事をしたアイゼンシュタットの市のエステルハーギー侯爵の城館、ハイドン・ハウスの映像が挿入されていた。エステルハーギー家はハンガリーの貴族としてハンガリア人の自治の実現に力を注いだといわれる。1867年のオーストリー・ハンガリー二重帝国の成立によってハンガリーはハプスブルク王朝の枠内で主権を獲得した。オスマントルコの支配の衰退がもたらした人種のモザイクはドイツ人とハンガリア人の間では一つの解決の形を見出したのである。

J・シュトラウスがハンガリーの「独立」を祝賀して作曲した「ハンガリー万歳」がプログラムに入っていることに重要な意味を含めたのではないか。パレスチナ問題もハンガリーの独立と同様の特徴がある。オスマントルコの支配のもとでのパレ

スチナの多様な人種関係は、オスマンの支配が終わり、イギリスがとってかわった過程でさまざまな緊張を生み出して、今日にいたっている。現在のイスラエルの国家としての存続は、パレスチナにおける人種と宗教の多様性をふまえた緩やかな国家形態をめざす現実的な歩み寄り以外には考えられないのではないか。そのためには和平とユダヤ人自身がその偏狭な選民意識を考え直すことがあればの話だが。オーストリー・ハンガリー二重帝国のアイデアは、現代においても有効ではないだろうか。これは私の独りよがりの読み過ぎだろうか。